

歴代優勝者によるニューヨーク研修旅行レポート

第四回優勝：ラ・サール高校（鹿児島） 御手洗伸さん



今回の研修旅行では6企業に訪問しました。

1社目は三井住友アセットマネジメントにお邪魔しました。1社目ということで緊張もしていたのですが非常に温かく迎えていただきました。ここでのお話の中で特に印象に残っているのはエコノミストの方のお話です。全行程の中でエコノミストという職業の方にお会いするのはここだけでした。エコノミストという仕事は実際にはそんなに単純なものではないと思いますが、その仕事内容について毎月発表される30ぐらいの指標を基にしながら経済の動きをグローバルに見ていくというように説明していただきました。また私に世界の変化を見ていくことが大事というアドバイスまでしていただきました。

2社目はタイガーアジアマネジメントの方にお話を伺いました。ここでのお話の中で印象に残ったのは資産運用のニーズについてのお話でした。日本ではお金を稼ぐことを悪いこととみなす傾向があるので資産運用をやっているところがまだ少ないがアメリカではトップの人々が資産運用をやっている。今後資産運用のニーズが日本でも上がってくるだろうというお話でした。この旅行の中でアメリカと日本の差というものを実感する機会は非常に多かったのですがこのお話もそういったものの一つでした。またアメリカではがんばれば報われるというシステムが整っているので経済の回復も早く、また日本の優秀な人間は海外に流れるのではないかとのお話もそういうものの一例として非常に印象に残りました。

もう一つ興味深かったのはアメリカには社会還元の精神が根付いているというお話でした。これも日本にはなかなかない部分だと感じました。

3社目はJ.P.Morganでした。ここでは昼食をごちそうになりながらお話を伺ったのですが本当に丁寧に説明していただきました。特に印象に残ったのは電車関連が今後成長してくるだろうというお話でした。電車は時代遅れだと思われるかもしれないが、エネルギーコストや排出権取引などの関係で輸送コストの低い電車が今後注目を集めるだろうということでした。どの業界が今後注目を集めるかについて具体的なお話を伺ったのはここだけだったので非常に興味深いお話でした。

また中国についてのお話を伺うと中国政府は内需を拡大したいが中国人は住宅を買いすぎるので都市の住宅バブルが起きている。資源がないけど労働力があるのがリスクだといった話をしてくれました。

4社目はシティバンクのディーリングルームにお邪魔しました。ここではまずその広さに驚きました。ニューヨークにあるディーリングルームの中で一番広いらしいということでした。広いというお話は前から聞いていたのですが想像をはるかに超える広さでした。またそこで働く人の多さにも驚きました。聞いたところによると600人以上の人が働いてこの部屋から誰もいなくなることはないとおっしゃっていました。また2003年の大停電の際にもまったくシステムが止まらなかったというぐらいのバックアップ体制にも驚きました。

もう一つ驚いたのは良い意味でとにかく自由だということでした。仕事さえしていれば他のことについては特に何も言われぬという日本ではありえない自由さに驚きを覚えました。

5社目はブルームバーグ通信社でした。端末についての説明を受けましたがとにかくその便利さに驚きました。数多くの情報が手にはいることはもちろん、自分の欲しい情報がより早く手にはいるというシステムが完備されていました。またここでは他の企業と違いオフィスに遊び心が溢れていました。オフィスの中に鯉が泳いでいる水槽があったり来客用の椅子がユーモラスな形をしていたりとオフィスのあちこちに芸術性にあふれるものが多数置いてありました。こういったところも日本にはなかなかないなと感じました。また日本人と違いアメリカ人はいったんオフィスから出るとしばらく戻ってこないのが、オフィスの中にメディカルルームを作って社員をできるだけ社外に出さないようにするという工夫にも感嘆しました。

最後はゴールドマンサックスにお邪魔しました。ここでも親切に沢山のお話を伺いました。

個人的に興味を持ったお話はゴールドマンサックスではチーム運用を行っているというお話でした。決定までのプロセスが長いという短所はあるが安定感や組織力があるという長所があるということでした。

最後にこの研修旅行を通じて感じたことを書きたいと思います。

まず私は今まで大学から就職まで日本の中でしか考えたことがありませんでした。しかしニューヨークで活躍する日本人の方々の姿を見たり話を聞いたりすると日本の中だけで完結してしまっているのだろうかという疑問が湧いてきました。今後はもっと世界に目を向けていかなければならないと感じました。

またレポートの途中でもたびたび指摘したのですがやはりアメリカと日本の間の歴然たる差というものを感じずにはいられませんでした。日本にももちろん良い部分はあると思いますがやはりアメリカの優れた部分を目の当たりにするとこんなにも差があるのかと痛感しました。

今回の旅行では普段経験することの出来ないことをたくさんさせていただきました。お世話になった方々みなさんにお礼を言いたいと思います。ありがとうございました。

第三回優勝：東大寺学園高校（奈良） 田中聖也さん



今回、ニューヨーク研修旅行において、5つの企業や機関の方々にお話を伺ったり、社内を見学させて頂いた。

まず1社目は三菱商事。プライベートエクイティ投資という、非公開の株式や不動産への投資について説明を受けた。株式を保有することで経営に関与し、投資先の企業を再生させ、株式等の価値を高めていくという。

2つ目は日本総領事館の経済部。ニューヨークの経済状況を把握し、本国に伝達するという総領事館経済部としての役割だけでなく、説明をして下さった方の経歴に基づいて金融庁でのお仕事についても知ることができた。

3社目はタイガー・アジア・マネジメント。主に空売りを用いて利益を得るヘッジファンドであるが、その空売りで利益を生み出す仕組み、また空売りが市場活性化に役立つことなどについて説明をして頂いた。

4社目はシティバンク。株式と債券の両方のディーリングルームを見学させて頂いた。非常にモニターが多く、トレーダーの人の机には何と8台ものモニターがあり、様々な情報や指標を手に入れているという。

最後はブルームバーグ通信社。金融情報端末について説明を受けたり、多様な現代アートに彩られた遊び心にあふれる社内を見学させて頂いた。

説明して下さった方々は皆日本人でいらっしゃるのだが、英語を身につけ、遠い外国の地で働くのはなぜだろうか？皆様にほぼ共通していたのは「よりよい条件があったから」ということだった。自らをどこまでも磨いていこう、という皆さんの姿勢に僕は感銘を受けた。

僕はこれまで「日本でしか働かない」と決めていた。でも、今回皆さんの話を伺って、まだ大学に行っていないような状況でそう決めてしまうのは良くないと思い始めた。こんな早く大きな可能性を否定してしまうのが、どれほどもったいないことか。大学では刺激をたくさん受けるだろうし、就職してからもそうだろう。決断はそれからでも全然遅くないようだ。

日本を離れているからといって、日本を捨てた、という訳ではない。「ずっとWBCを見ていた」という方もいらっしゃったし、「得た投資の知識を日本に還元する」という方もいらっしゃった。皆さんそれぞれ日本に注意を払い心配していた。このことに気づけたことも、外国で働く可能性の存在を認識したことの理由である。

先方で「日本の将来を担う2人」と言われた。単なるお世辞かもしれないが、「日本を担う」、この言葉が実現するように、日々努力を続けていこうと思う。

最後になりましたが、すばらしいお話をお聞かせ下さった皆様、研修旅行にご招待頂き、貴重な時間を提供して下さいました金融知力普及協会の皆様、さんざん御迷惑をおかけしたにも関わらず、我々を懇切丁寧に案内して下さいました鈴木さん、李さん、水谷さんに、厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

第三回優勝：東大寺学園高校（奈良） 中里静さん



僕は今回の研修旅行で、1 イベント、1 機関、4 企業にお邪魔し、1 イベントを除く5 か所で7 人のニューヨーク在住の日本人の方の話を聞かせていただいたので、その中で印象に残った出来事を簡単に記そうと思います。

まず訪れたのは、昨年・一昨年と本欄で言及されている、高校生がバーチャル企業を組織してそのビジネスプランのコンテストを行う会場です。ご存知の方もいらっしゃるでしょうが、実は第3回エコノミクス甲子園全国大会で同じような企画を体験し、ビジネスプランを作る、プレゼンテーションをする、という両方で非常に苦労し、身をもってその難しさを知ったのでありますが、そのことと相まって例年以上にその凄さを感じられたのではないかと思います。さて、そのコミュニケーションに関連した話を三菱商事にお邪魔した時に聞かせていただきました。そこで、次に訪れた三菱商事での話に移ります。

三菱商事で拝聴した最も印象に残った話。それは、「日本人の話はわかりにくい」という話です。アメリカ人は学校で「結論からまず述べる」ということを作文の基本として習っているので、背景から述べがちである日本人の話はわかりにくらしく、もう途中から聞いていない、ということもあるそうです。もちろん、どちらの話し方にも特色があり、一概にどちらのほうが優っているとは言い切れないが、ことわかりやすさに関して言えば結論から述べるほうがわかりやすい、ということもおっしゃっていました。思えば僕も、背景を重視する傾向があるなと思い、然るべき場面では結論から述べる方が良いのか、ということを知ることができ非常に身になる話でした。

次に話を伺ったのは日本総領事館経済担当の方です。ここでは2人の方にお世話になり、主にそのうちの1人に話を伺いました。その方は金融庁から外務省に出向していらっしゃる、特に、それまでどんな仕事をなさっていたのか、を聞いたのですがその最後に、これからの社会では最低でも次の5つをやっておけば必ず役に立つ、というものを教えていた

できました。その5つとは、英語、数学、経済、会計、そしてコンピューターを扱う能力だそうです。それを聞いて、やはり次の休息とは当分すれ違いな、と思いましたが、同時にこれからの指針がぼんやりと見え、やはり有意義な経験でした。

さて、その次は Tiger Asia Management L.L.C.です。ここでの話では特に印象に残りました。話をしてくださった方は、「アメリカに留学したときに、『将来何をやりたいかは location（場所）、industry（業界）、function（業務内容）の三つのうち優先順位をつけて決めなさい。ただ、3つすべてを満たすことは稀だから諦めなさい。』とアドバイスをもらった。日本人はそのうちの配属地と業務内容の2つはただで捨てているが外国人はそのうちどれか2つを満たそうと必死で就職活動をする。だからその発想は変えなければ、と思った。」とおっしゃっていました。でも僕の知る範囲での日本の現状ではそれはまだまだ望んでも厳しそうなのであり、5年後はどうなっているのだろうか、などといういろいろ考えさせられました。

次は、Citigroup Global Markets Inc.にお邪魔しました。ここでは、株式のディーリングルームと債券のディーリングルームを拝見しました。同じ建物の3階と5階なので広さは同じですが、債権は種類が多いので4階も占めているそうです。ここでの一番の驚きは、なんといってもその広さです。全米で一番大きい、小さな体育館ほどの大きさの一室に800人分ほどの机が整然と並んでいました。そして、もう一つの驚き。それはモニターの数です。少ない人で2つ。多い人では、2段4列でずらっと8つものモニターを並べているのです。そのモニターが並んでいる真下、つまり机の上ですが、そこには1つ電話がありました。といっても見慣れたものではなく、知らないとしても電話だとはわからないであろう、横約40cm×縦約15cm×高さ約8cmほどの、ボタンがたくさん並んでいる黄土色の物体でした。また、働いている人はとても忙しそうで靴の修理業者のような人に何度も会いましたし、机の前で昼食をとったりしていましたが、みんな5時には帰るそうです。Citiではまず部屋に入って驚き、次に机を見て驚き、最後に周りを見渡して驚き、と驚きばかりでした。伺った話も興味深く、最後まで全く飽きることもなく面白かったです。

最後は Bloomberg L.P.です。概要については、昨年・一昨年の方が書いていらっしゃるのので省きますが、社員には営業や会計や記者そしてプログラマーの人などがいるそうです。それを聞き、僕がブルームバーグで最も優れていると思った点は、社員としてプログラマーがいることだと思いました。というのは、プログラマーがいることによって、顧客の意見などによって企画した新機能がダイレクトに実現できます。また、既存の技術で実現できるが存在しないもの、例えば、現在の技術で腕時計はもっと小さくできるかもしれないが見難いからしない、といったような必要に迫られていないのでしていないことを改めて実現できるであろうことからです。また社内のユニークなシステムについての話、社員の交流を促進するためにエレベーターは決まった階しか止まらない、というものも聞かせて頂きました。どういうことかというのと、「あるエレベーターは6階しか止まらない。そこでそれより上の階に行くためには、歩いてエレベーターを乗り継がなくてはならない。その歩いている途中こそ、普段は会わない（配属が違う）方たちと触れ合う機会があるのだ。」ということです。このシステムや社内の至る所にアートがあることなどから、とても新鮮でいて楽しい会社である、と思いました。そしてそのことは働く上でも重要なことなのでしょう。

前述の通り、今回のニューヨーク研修旅行では7人の方に話を伺いましたが、ひとつ個人的に残念という言い方をすれば失礼になりますが、言語や文化その他といった高い壁をどのようにして打開してこられたか聞きたかった身としては、やはり残念としか言いようがなかったことがあります。それは、半分以上の方が子供のころアメリカ在住経験があったことです。この言い方には含みを持たせていますが、まだ現在の日本ではこれが現実なのかと思いました。しかし同時に僕たちの世代がこれを変えていくことができればいなとも思いました。

成田空港での事故で一日出発が遅れて日数が減るなど、想像だにしないハプニングもありましたが、新たに知ることがあった旅行でよかったです。最後に、徐々に勢いをなくしていく拙文をここまで読んで頂いた方への感謝の念を記して締めたいと思います。ありがとうございました。

第二回優勝：開成高校（東京） 安達光さん



日本とアメリカの違いは何か。あるいは、日本人全体を見た時に、足りないものは何か。

今回の旅行では、この2点が特に気になった。

というのも、精神的・物質的いずれにおいても、日本、少なくとも大多数の日本人の持つ常識あるいは認識よりも遥かにハイレベルな世界がそこにあったからだ。

まず、初日に見学したブルームバーグで情報端末システムに度肝を抜かれた。株価情報は勿論のこと、起業の経営者やブルームバーグ社員のプロフィール、様々な言語でのニュース、拳句の果てには近所にどんなレストランがあるか、というようなことまで全てをカバーしているだけでなく、オフィスには好きなように軽食をつまめるコーナーがあったり、壁が全てガラスで、仕事場の中の様子が把握できたりと、日本の企業からすると考えられないような特徴が散見された。

また、今挙げた特徴は、3日目に訪問したタイガーアジアマネジメントにも見られた。お話を伺った福井さんによると、これは「仕事場や環境によって仕事が出来ないという言い訳を与えず、いい仕事をしてもらうため」で、日本の一般的な会社におけるオフィスとは一線を画したものがある。「社員のやる気を出させる為にお金を使う」と、「出来るだけ支出を切り詰める」のどちらがより良い結果を生むかについて、確かな解答を目の当たりにした。

ところで、考え方の違い、あるいは明確な日本とアメリカの違いという点では、2日目に見学したバーチャルエンタープライズショーのビジネスプランプレゼンテーションを挙げなくてはならない。これは、バーチャル世界内に高校生のチームが設立した会社についてのプレゼンテーションが行われ、審査員がその内容と質問への解答から最優秀チームを決める、というものののだが、そのレベルは恐るべきものだった。その会社が現実世界にはないということを忘れさせる程の綿密なプランや、そのプランを発表する際や質問に受け答えする際の物怖じしない態度。各チームがCEO等の役職を決定し、説明や審査員からの質問はその質問や説明に適した役職の人が受け答えを行っていたこと。これら全てに感動を覚えた。これらのことが出来る高校生、さらにその機会を提供し、また可能にする大人・社会（この大会の優勝賞金は25000ドル。起業資金としては十分で、やる気も出るというものであろう）。日本にはまだまだ、そして当分の間、ないものだ。

さて、もう一つ。NYでは現地の方だけでなく、二人の日本人の方にもお話を伺った。前述した福井さんと、日本領事館の小澤さん。お二人は共通して、「情報を得るには、情報を持っている人と直接近づくしかない」という意味のことを仰っていた。情報社会、コンピューター社会といえども、「人間は進化しない（小澤さん談）」から、それだけでNYにいる価値がある。この考え方には大いに驚き、そして感銘を覚えた。私にとっては、この話が聞けたことで、NYに来た価値があったと思う。

最後に、この旅行に来ることができて、またエコノミクス甲子園に出ることができて、本当に良かったと思う。知り合いも増え、知識や体験や考え方も増え、何より楽しかった。来年参加する高校生の皆には、地区大会・全国大会を勝抜き、是非この素晴らしい体験を得て欲しいと思う。

第二回優勝：開成高校（東京） 安田吉孝さん



今回私はエコノミクス甲子園に優勝してその商品としてニューヨーク研修旅行というめったにない機会を与えられたわけである。しかし優勝者ということで経済知識に相当精通している設定のはずなのだが、実は私はほとんど勉強しておらず、した時間といえば地方大会と全国大会当日の移動時間くらいである。相方は寝てる時間以外のすべてをこの大会に向けての勉強に費やしていたというのに申し訳ない。おまけに英語力もほとんど無いため、これを読んだ人は「お前はこの研修旅行で何を見てきたんだ」と怒られてしまうかもしれない。

私にとっては恥さらしになるだけなのだが、それでも研修旅行と銘打たれているからには書かざるを得ないので書こうと思う。

今回見てきた企業または機関は主にブルームバーグ、メリルリンチ、日本総領事館、そしてタイガー・アジアマネジメントであった。すべてに共通して言えることだがどの場所もそれぞれの建物に入った瞬間にその企業のオーラというものを感じるのである。に入った瞬間に思わず襟を正したくなるような何かを感じるのだ。

次に、これらの四つを個別に見ていこうと思う。まずブルームバーグ。社内にあるスタジオで生放送されている株価情報がほぼリアルタイムで日本にも流されているなど驚くことは多々あったが最も驚いたのは二台のモニターと三色に色分けされたキーボードを使ってひとつのボタンを押すだけで全世界の全言語のニュースを見れたり株価が分かったりするシステムであった。世間一般で言われている「グローバル化」の真髄を見た気がした。

続いてメリルリンチ。見学したのは最上階の大会議場だけであったが、それでも十分メリルリンチの凄さが垣間見ることが出来たように思われた。先ほど書き忘れていたのだが、メリルリンチのあと、ニューヨーク経済史博物館に行った。何せ英語が読めないなのでその凄さを伝えることは出来ないが、昔発行された一万ドル札や5セントで出来たソファなどがあった。また日本総領事館経済部やタイガー・アジアマネジメントに行ったとき思ったことだがとにかく少数精鋭システムになっていたことが私にとっては驚きだった。タイガー・アジアマネジメントに至ってはジムまで用意されており「仕事に集中できなかつたと言いつつさせない」ような仕組みになっていた。

まだまだ書きたいこともあるのですが、僕の文章能力ではこの程度が限界のようです。行く先々で迷惑をかけたのに嫌な顔ひとつせず笑っていた鈴木さん、観光の時間は暇さえあれば寝ていた相方、二人ともどうもありがとうございました。

最後に第三回エコノミクス甲子園も開催されるようなので、その優勝者に向けて。英語を勉強しておく、私のようにならず済みます（笑）。

第一回優勝：ラ・サール高校（鹿児島） 木原健太郎さん



今回の旅行の中で、普段出会うことのない人達と会うことができました。

日本で今までの生活をしているのとは全く違う観点で皆さんが暮らしているのを共通点として感じました。日本とは規模の違う世界の中で生きているんだなあと思いました。

それぞれにやっていることは違っているけれど、厳しい社会の中で成功を修めているだけあって、自信や貫禄といったものがありました。それだけでなく、全ての方が自分達の訪問に際して、親切に対応して下さい、優しさも持ち合わせているのも上手くやっていくのには重要だと思えました。心に余裕がある、それだけの余裕を持てる表れな気がします。

また、皆さんが、大学で勉強していたり、ファンドとして働いていたりと様々なことをやっていたり、現状を受け止め、各の今後の目標、あるいはやりたい事を捉えているのもよく覚えています。

出会った沢山の人は、優しいだけでなく、自分の体験を交え、多くのアドバイスを与えてくれました。これこそ、日本で高校生活を送っていても知りえないことであつたし、学校では当然の様に伝えられない内容でした。実際の場で多くのことを体験しているから分かることが多々あり、現実味を持って考えさせられることも多かったです。株式や為替などでの関心を持つこと、アメリカへ来てこちらで勉強する方がずっとよいということや、日本の金融経済は発達しているわけではなく、日本でのネームバリューは国際社会で意味を持たないという厳しい内容まで、話を伺った皆さんが共通認識として持っていたことも印象的でした。それだけに、株式を今から始める国際経済について自分で考察してみる、留学をする、といったことがいかに重要なのか、しっかりと考えさせられました。

学校では教えてくれないような内容を知ることができた、と書きましたが、それが日本の金融経済の発達しない要因として結びついているのは確かだと思います。こちらへ来て、沢山の高校生が経済を学び、実際に企業運営を行ったりしながら、経験を積んでいることはすごいと単純に感じたし、それを見たのを踏まえて、皆さんのお話の内容を考えると、その話の意味がもっと深く理解できた気がします。自分も、今ではそれなりの理解を身につけているかもしれませんが、エコノミクス甲子園まではちゃんと経済を学習しようと思うこともありませんでした。同じ年齢とは思えない感じでアメリカの人達が活動に取り組んでいるのを見ると、将来的にそんな人達と共に経済の場で渡りあっていけるのか不安に感じます。その点でも日本とアメリカとは全く土壌が違うんだということを再確認しました。

成功していけば、どんどんと伸びていくことができるかどうか、金融界の地盤の大きさがどれだけ違うのか、そしてそもそも学生時代からの教育環境と、全く違うことばかりです。ヘッジファンドという利益を得続けねばならない状況で活動している杉本さんの話の中で、「アメリカではこれだけ環境が違う。日本の中だけで経済を見ていても不十分だし、その状態は大きなハンデだ。こういったアメリカの環境下で戦わないといけない。だからアメリカに来て学んでいかなければならない」と伝えられたのは本当に今の状況を表しているのだと思います。

日銀や経済産業省からの留学生も来ていることは、その年齢になってからでもアメリカで学ぶことが多くあるといういい例なのだとも思いました。

お金に対する価値観も全然違って、アメリカでは儲けることが普通の欲望だとされている、という話は皆さんから聞きました。さらに、なるほどと感じたのが、日経の松浦さんの話で、「アメリカは儲けようとするのは当然だし、日本とは桁が違いすぎる。でも、日本のトップは自分のことしか考えない。アメリカのトップの人達は、儲けを必ず社会に還元しようとする」という観念の違いを教えてくださいました。日本でのライブドア、村上ファンドといった会社の隆盛と、

アメリカの有各企業との差はここにある気がしています。アメリカで出会った人達に共通していた「余裕」が会社全体に広がって、成長を続けているのかもしれない。

今旅行で、世界経済の中心で活躍する日本人の皆さんとお会いしました。この経験は、自分の考えや物の見方を大きく変えてくれました。

これからも経済を学ぼうとする自分にとって貴重な助言や激励も受けました。もしかしたら将来あの人達と同じ舞台上に立てるかもしれません。そうやって経済を学び、第一線で生きているように努力したいと思っています。

1月のエコノミクス甲子園九州大会からの3カ月にわたり、一般に体験できないことを色々とさせて頂きました。

ニューヨークでも、観光以上の滅多にない研修を行うことができました。

来年のエコノミクス甲子園に参加できるかどうかは分かりませんが、将来の自分にとっても実りある経験であったと思います。これから数年後に社会に出る時にも大きな影響を与えてくれるでしょう。それだけに、大学以降も頑張っていこうと思いました。

今回、こんな素晴らしい機会に巡りあわせてくれたり、鈴木さんをはじめ、スタッフの皆さん、NYで出会った皆さん、沢山お世話になりました。本当にありがとうございました。

第一回優勝：ラ・サール高校（鹿児島） 平郷翔太郎さん



今回僕は、ニューヨークに来てとてもたくさんの事を学びました。その中でも強く印象に残っているのは、バーチャルエンタープライズです。バーチャルエンタープライズというのは僕たちと同じ高校生がビジネスプランを立てるというものです。まず、初日は実際にどのような事を行っているのかを見せてもらいました。行った高校はお花の詰め合わせのギフトを売る（売るといっても実際に物を売るわけではなくバーチャルの話です）というビジネスを2日後の出店のために準備していました。どれをどのくらい売るかを決めるセクション、カタログを作るセクション、編集するセクション、これをする事によってどのくらいの収入を見込めるかを計算するセクションなどに別れて作業をしていました。ここで僕が驚いたのは、高校の中で実際に社会で行われているような会社経営のようなものが行われており、しかもそれが普通にある学校の授業であるということでした。やはり経済に対する意識が日本とは大きく違うなあということを感じました。高校生でそのようなノウハウを学ぶことは、英数国理社をすることよりもずっと役に立つ事だと思うし、日本の企業とアメリカの企業の大きな力の差は、このような所から根をはっているのではないかなと思いました。

2日目にはバーチャルエンタープライズの企画のプレゼンのコンテストを見に行きました。とても企画がしっかりしていて、現実にプラン通りのビジネスをしても成功するようなものもいくつかありました。僕は企画そのものももちろんすごいなあと思いましたが、他の事にとても感心しました。それは発表のうまさです。きっと日本の大人でもあんなにうまくはできないと思います。一流企業の社長クラスの審査員相手にビジネスに関する質疑応答をしている所には脱帽してしまいました。

3日目はバーチャルエンタープライズが実際に出店して、形だけで売買のできるというトレード・フェアに行きました。ゲームを客寄せに使うところ、抽選会を使うところと戦略は様々でとても面白かったです。

この旅行を通して僕はアメリカと日本の歴然とした差を感じました。どちらも先進国であるのに、こんなにも差があるのかと思います。そしてその差は少なくとも、僕らの年の高校生から生まれています。日本を世界のトップレベルへもっていくには、やはり子どもの頃からの金融知力が必要なんだということを N.Y に来て痛感しました。あと、日本のおかしの美味しさも・・・。

本当にこの旅行は長くはありませんでしたが、貴重でした。世界のトップレベルにふれて人生観がガラリと変わりました。本当にクイズを頑張って良かったです。

第一回優勝：ラ・サール高校（鹿児島） 亀岡孝展さん



今回、自分達はエコノミクス甲子園の優勝者としてニューヨークの研修の機会を与えもらった訳だが、この貴重な機会を使い様々な施設や企業の見学をさせてもらい、自分達がアメリカの金融経済を少なからず理解できた。ここに自分達の見学してきた所の事を書こうと思う。

まず、2日目に見学したブルームバーグ通信社について。日本でも同時通訳でTVに番組が入っており、金融経済（特に株価）の報道でかなり重要な位置をしめている事が分かった。実際、本社へ行ってみるとフロアの電光掲示板には世界の平均株価がリアルタイムで流れる表示となっており、中でも一番驚いたのがその情報端末だった。

二つのモニターと一台のキーボードを使って、世界の市場の銘柄の株価だけでなく、分刻みでの全世界のニュースや不動産情報、企業の上層の人事構成やその人の仕事の経歴、他に勤めている企業、住所まで分かり、さらには全世界の飛行機の発着時刻まで分かるというマルチノードで、オフィスで皆でこれを利用して。ここまで多機能な端末は珍しく、見学のおみやげには日めくりメモパッドで「一日一機能」で説明がなされていた。世界で必ずどこか一ヶ所は取引所の開いている現代は、世界のいろんな出来事が株にすぐ反映されるから、しっかりと世界で起こっている事を見つめていかないと立ち遅れてしまう事が理解できた。また、会議室にはモニターがあって、そこには世界各国にある支部の会議室が映し出されていて、テレビ会議をする事ができるようになっており、やはりいろんな国との連携が大事になってくるというのが良く分かった。

また、大企業といえば証券会社のメリルリンチにも見学に行ったが、かなり大きなオフィスで人々が皆、コンピューターを利用しており、ブルームバーグと似てモニターが1つのパソコンに複数ついていて、やはり多くの情報を一度に扱う必要性を感じた。

二日目には Norman Thomas High School で仮想の会社である Not Just Flowers, Inc. という所のオフィスを経営している生徒達と会ったが、商業高校ではないのに Virtual Enterprise に参加して、一日に約2時間作業をしている事を聞いて、起業への関心の高さをうかがわせた。また高校と一緒に来ていた、フィンランドやスウェーデン、イタリアなどから来たチームは Virtual Enterprise に参加しており、後日、実際に世界各国と NY 市内の多くの学校が出店して自分達は"バーチャルな"お金を使って買い物をした。その大会は文化祭を大きくしたような感じだったが、特に会計の面では明細書を作るなど気合いが入っていた。

関連して、三日目には Virtual Enterprise がメリルリンチ社の協力により "National Business Plan Competition" が催されて、それを見に行っただが、どのチームも高校生とは思えない位立派で、彼らのビジネスプランはしっかりしているように見え、人事まで詳しく説明されている事に驚いたが、審査員がコンサルタントであったり、メリルリンチやシティ、

HSBCの人などから構成されていて、鋭い質問がなされていて、レベルが高かった。Virtual Enterpriseのようなプログラムは日本で実行されてもいいと考えた。ちなみにこのコンペの優勝者には3,000ドルの会社資金と個人に1,500ドルが与えられる。

残念ながら、NY証券にはテロの影響で見学できなかったが、ニューヨーク証券取引所は開場時に見学させてもらった。現在でも声を張り上げ、売買条件をカードに記入して投げ入れる、というスタンスが維持されているのを目の当たりにして、タブレット端末を使って取引する人達もいたけど、やっぱりそうするのが好きな人達がいる事が分かった。値の入力はコンピューターを介するが、そこまでは全てが手動であり、2時半の閉場まで熱気に満ち溢れていた。経済の原動力がこういった所にあるのを知ることができた。

また、日経のオフィスも見せてもらったが、日本経済では大手の日経も、アメリカではやはり中くらいの企業のように。そこで頑張っている記者達（多くは日本人だった）のおかげで報道が成り立っている事がよく理解できた。

この旅行で世界経済とそこに働く人々の姿を垣間見ることができた。また自分達の生活にどれだけ大きな影響を与えているのかも感じ取れた。これを活かして自分が将来、金融経済と関わりをより強くもつようになった時（具体的には成人してから）、役立てればいいと思っている。